

安方志

安方志義傳
前編四冊

卷之二

13
3237
2



へ 13
3237
2

昭和十年
七月九日
購

いづれも時光過やそく。日月梭のごとくめぐりて年を即己ふ十五才の

白川 關

第三條

緑亀館文庫

功徳を説。殺生の悪業と戒るとりへども。耳のゆへに山野の鹿を
追まわし。劍法を学ぶ。諸鳥の射らりて弓勢と試す。或は牧駒の

繩子綱うけて高山廣野をこせわたり。己の切瑗琢磨して其を徴し。

専ら武藝を励し。さて一日筑波山の奥深くの入り。獣をたづぬ

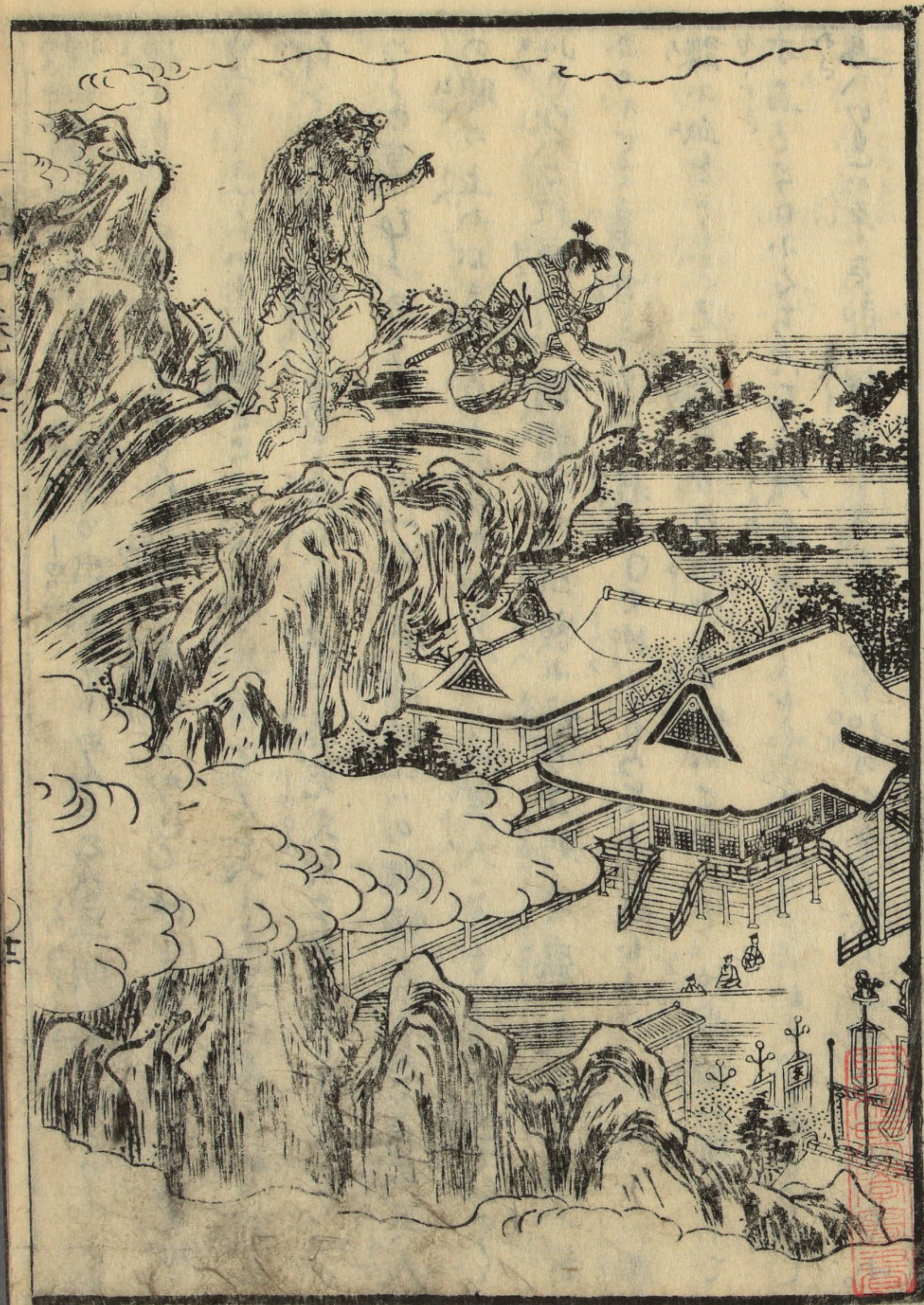
る。小の忽し。小の峯より虹の如き白氣。ちのわりけ。年を即

これに怪し。岩石をつつ。荆棘と踏分。からうとて其所到。其を

いづれも。岩窟の裏の暗き所。一對の明鏡をのり。さう。終る。光を

物のり益怪に眼をさざりてよくえれば。五丈むらりの大蝦蟇あり。かの光り物の両眼のややかてどめりけり。大なる口はひくもて白氣を吐形勢おもしろるも思あり。平太郎素大膽強氣の者なれ。携るる弓小捕箭をつぐ。蝦蟇のむまさう。妖的ふまうりくとひまきさかりて。已ふてなさん。つるふ。忽雲霧ひきかきりて。蝦蟇の姿をくじし。岩石樹木鳴動し。五体ふびれさくとも。屍居ふ腫と倒るる。夢のらちるる。志ししてやうく人ごらつま。起よりてえれば。かの大蝦蟇化して白頭の異人とあり。岩のなま尻うけ。手をあげて平太郎とほまわ。平太郎。これ凡人なるはととひつ。をくともて。跪きけり。異人のひけるや。我白氣を吐し。汝をくふまねん。為あり。我の是二千歳をあり。蝦蟇の精靈あり。我天竺蝦蟇仙よりつり。

神変不思議の術ありて。鬼神を役し。悪獸毒虫をつらひ。雲霧風雨を起し。飛行自在よりづんのもあり。ゆゑ小自肉芝仙と号を。ちうごらつ。岩窟小住の汝。おまもえんが。為あり。其ゆゑいんとるれば。我かひて佛法王法と亡し。此土を魔界おまさんと。おん望のりとし。時々。ぼてこれま。おん打るぬ。今より。我汝小力とて。かひの望と。とて。さんとおりのあり。汝のいま。汝が素姓と。おんほじけし。我語をて。すべし。神汝の人王五代の帝。桓武天皇の子。葛原親王より。五代上總介高望の孫王子と。出て遠う。と。前將軍平良將の嫡男。港口小次郎相馬の将門が。実子あり。亡父将門押して。帝位小のや。んと。隠謀と。くら。と。猛威を。關八州。お。う。ひ。權勢破竹のごとく。あり。不幸時を得。と。去る。天慶三年二月十四日。田原藤太秀郷上平太貞盛が。み。其才。か。び。一門。從類。尽。く。亡。失。ぬ。汝が。



千歳せんざいの蝦蟇がまの精せい
 異人いじん小化こけして
 平太郎へいたろう小謀こまう叛はんを
 くらめ妖術まじまじを以もつて
 相馬内裏さうまうちりの
 形勢けいせいをえり

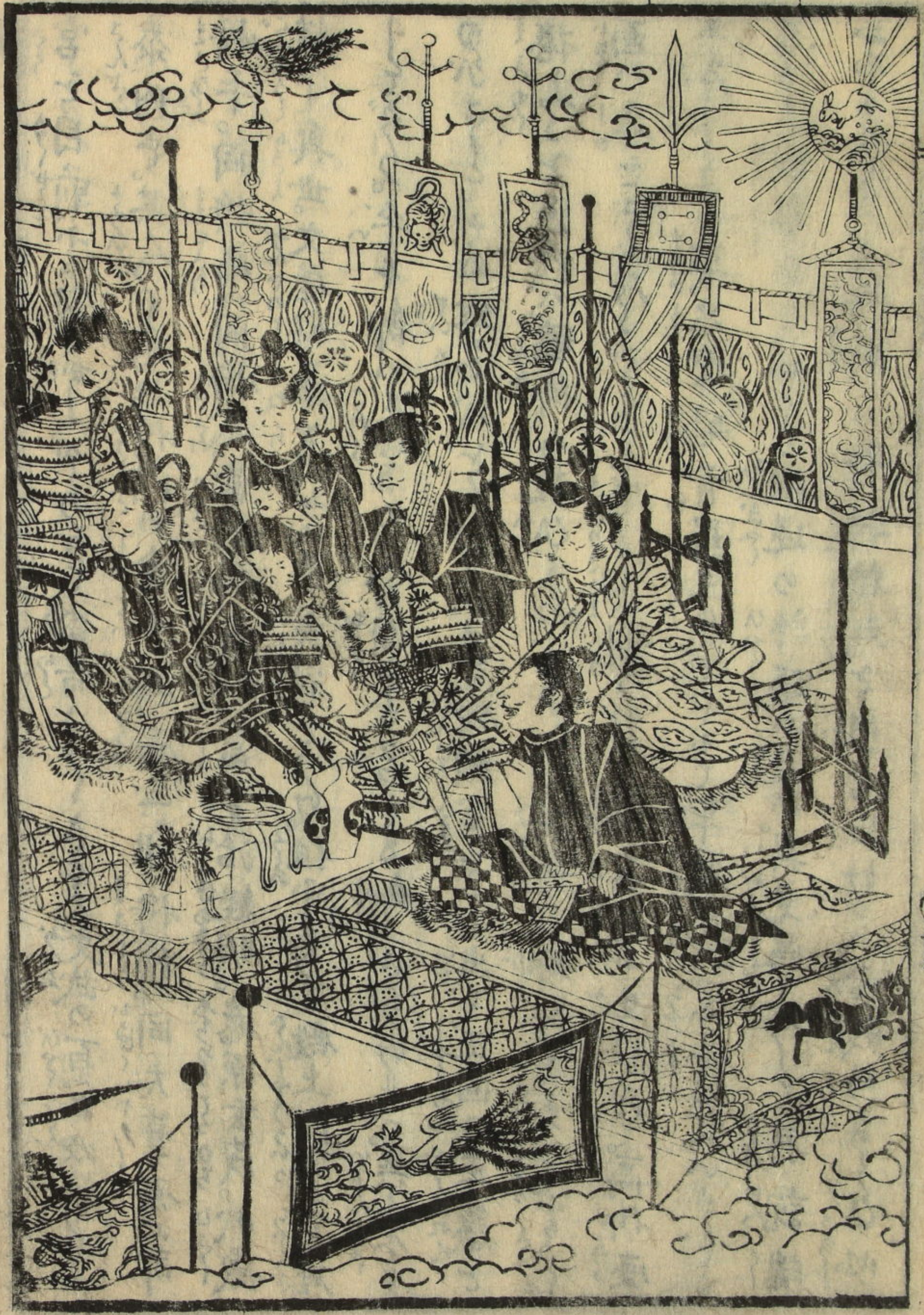
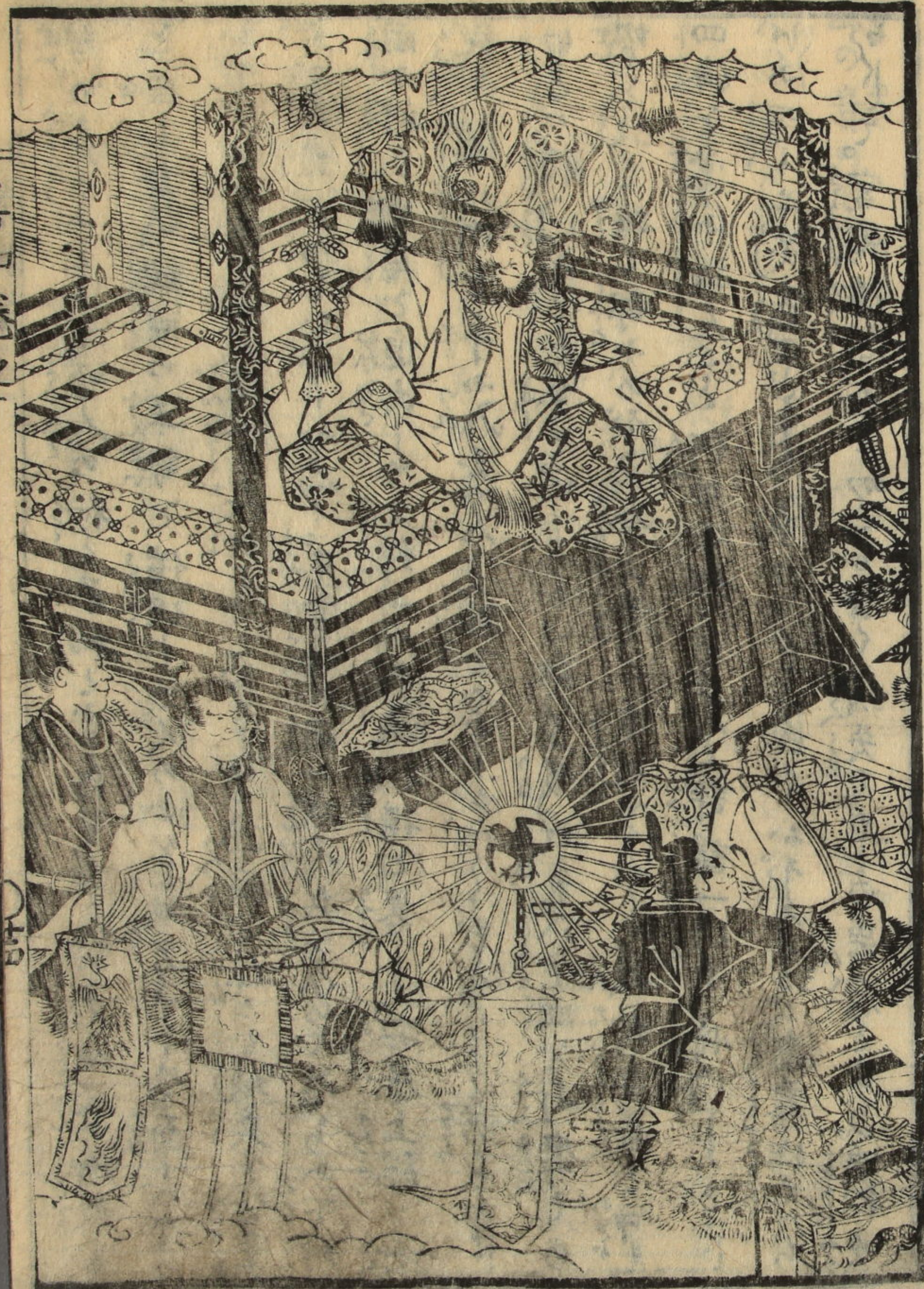


妍如月尼。仏法を信じて汝を出家せしめんと欲ひ。且朝敵の胤とす。
 他小りんきとんとおとされて。汝く素姓をかきて汝ふとんと告ぐる。
 印とむをびて檀中おのて虚空の氣と吞。咒文かきとひく。
 印の草むのうらより。一ひきの蟾蜍一匹の觸驪をくみて飛出異人
 の膝の上おかきとりの所おかれり。ね異人これをとて返して。
 此のいられ将門が觸驪あり。は額お疵ある。則身盛が矢のあたる。都
 小のいせも鼻首あたるを。我かして術をりてうぐひおまん。汝試ふは觸
 驪お血をとぎえよ。血をぢの證お骨髄おとるべし。汝貴族の胤とて
 木石とすのふくらんこと。残念おのぞや。くらとす。いもいもどやといひて
 与へけい。平を部押つぎま。手お中。指の血をとらりて觸驪おとるべし。

其は骨髄おとる。とりの。忽觸驪の額より一道の陰火閃く。とりのわがり。
 冷風と吹て平を部が牙うちふとんと冷とありね。平を部奇異のおひ
 とは。さては傳へて。将門將軍の我父おており。けう。とれ。とれ。とれ。とれ。
 唯い中た土民百姓原の子ある。とのおひとれ。人お立交る。お我ある。人臆
 して侮襲押し。この無念と。正しき王孫とて。おる。いぶせ。姿こそ口と
 け。たとひ亡父朝敵おめ。其打たる奴原こそ。我仇よ。其は。小た。とけ
 か。ん。こと。大丈夫の所。おの。お。と。これ。と。お。と。打。と。る。は。い。は。い。
 父うへ。と。や。草の。陰。お。我を。賦。甲。斐。る。ま。き。の。と。お。ひ。お。ひ。つ。ん。我。今。より
 大儀をおのひ立本懐と。けて。修羅の苦惱と。と。ひ。宿根の。芽。接。を。と。
 さ。せ。と。さんと。觸驪おむ。活。と。る。人。お。の。ひ。と。と。て。涙。と。と。り。と。お。は。し
 け。と。異。人。か。と。ね。て。云。汝。が。其。猛。志。お。る。と。を。と。ら。り。と。る。ゆ。え。か。く。相。見。こ。と。

りしめぬ。我術をりつて将門が宮建し。相馬内裏の廣大なる形勢と見えべし。又印をむむび咒文とまらるといふ。山河草木動揺し。遙小流き谷底より。英々たる白雲のたおらり。須臾の間ふひろく。眼前大内裏の形勢とめりつて。其さむいんとするれば。南北三十六町。東西二十町あり。四方ふ二十二の門あり。東ふ陽明待賢。郁芳門。南ふ養福。朱雀。皇嘉門。西ふ談天。藻壁。殷富門。北ふ安嘉。偉鑿。達知門。紫震。清涼。温明殿。日花月花の兩門。陳坐軒廊。左右の掖。南殿の階下ふ。右迄の橋。左迄の櫻。若やふ。中央ふ鳥の旗と立。左ふ日の旗。青龍。朱雀の旗。右ふ月の旗。玄武。白虎の旗。丹と暉とじて。風ふまひき。日小映む。其外七十二の前殿。三十六の後宮。鳳の薨虹の梁雲ふそびぬ。さしむい。造るる宮殿樓閣。尽められけし。恰も秦の咸陽

宮と目前ふるるが如し。やのりて。當音とくきとえ。文武の百官次第く。不泰内を。其人ぐ。将門の舍弟。御厨三郎。将頼。同大葦原四郎。将平。同将為。同将武。常羽。御厩。別當。多治経明。藤原玄茂。武藏。權守。與世。文屋。好兼等。かの衣冠とつ。位ふりて。殿上階下ふ。座し。てがり。平を即へ。是等の人の面をも。あつたりけし。異人。尽く。ひさしてその姓名か。とへり。さて。殿頭官も。出て。正面の玉簾と捲上ると。それ。臨御の粧ひ。うら。と。して。衣冠の御衣。若く。遠く。面。朱。を。さ。な。る。と。て。睦。逆。不。割。の。り。鬘。左。右。ふ。生。け。て。高。御。座。小。存。し。る。姿。只。摩。醜。首。羅。王。の。い。て。平。親。王。の。忌。を。さ。し。い。く。と。あ。ら。ま。形。勢。あり。か。て。叛。逆。の。評。議。お。及。び。異。見。區。く。り。て。其。説。端。お。わ。り。る。が。御。厨。三。郎。將。頼。列。と。出。て。け。し。け。る。合。戦。の。あ。ら。ま。必



勢の多少ふらふら。唯人の和と不和とふらふら。先廻文の御教書
 と成りぬ。諸國の軍勢と催促して人の心を窺ふ。面々の
 おがひぬとせむ。權守與世とてせむ。一國と掠るも坂東と皆棄
 も。その罪りつてあるべし。先常陸の國不攻入。兵とひてならぬ下野
 國不移り。國司と追出して上野不入。武藏相摸と畧し。安房上総と打
 從て。關八州を手に入むりんと。踵とめざると。とる所ありけ
 けと。將門やと笑て。いふもつひつ哉。我東八個國と打靡。その
 勢とて推て都下のり。今上帝と遠國ふらふ。我新皇帝と仰と。
 四海と掌不握ん。何の子細、ゆんと。評議一決し。將門よりこぼ
 けふ呵くと笑。さ。こどもふひたてとも。ゆくおむえらる。忽霧はくた
 かくして。宮殿樓閣のたかきも。消去て。ゆくの岩窟とあり。唯松吹

風の音のこも残りける。異人へのめど。若上ふのり。平次郎も
 大内裏の廣大あると。父が猛形勢とて。いふと志と勵し。父生前不
 望ととげむ。恨と黄泉不抱て五道の形ハチとと。一靈の神々
 な不のまき。わらん。我村中小乃人。不肖なり。父が英雄の似むと
 つも。今より其志とつぎ大儀と起して。一天四海と掌不握り。百敷の
 大宮人ふか。つれ。百官万民を眼前不照。父の孝養はくへ。の
 べ。活て其志ととげむ。断食して死し。内界外界の悪
 神邪慢我慢の魔王不誓。一念悪靈とあり。天下をくぐり。と
 いひて。大小憤發し。眼と屹と見ゆ。牙とと。拳とふ。り
 ける。左右の指の爪各手の甲不透て流る血ハ。山とふ。死手
 紅と絞ける。形勢。おそ。異人これとて打る。

蝦蟇の死
りて
鬼土
蜘蛛
を
役



善知老

ええとありふり。平を即益奇異のそひとはし。カハ髑髏と押し
き懐し。つひ小山とくらぬ

○案る小抱朴子曰。蟾蜍十歳とん。頭上小角あり。腹の下丹書あり。
名づけて肉芝と云。能山精と食ふ。人得てこれと食。仙術家小取用
べ。以て霧と起し。雨と祈り。兵と辟。自縛と解。云々世小蝦蟇の
術とりふ。是乎。又冷齋夜話。中貴楊戩と云者。大なる蝦蟇小。
牙と交ト。支と記せり。陪書。獨孤陀が傳ふ。陀が家の婢女徐
阿尼と。猫鬼と。術と得る事と記せり。猫と。術
ものれば。蝦蟇の術もあれと。四國の大神も此なるあり

安積山

第四條

此日如月尼庵室あり。平太郎今知り。菴と出ていざと。皎らさん

又も殺生小。ゆき。うたの考のそりや。愁ひつ。常香とありて
居る折し。平を即弓矢と携て。来つ。尼公のそばと。語り
て。ひげ。かひて。亡父の素姓と。侍と。いふ。語り
へ。し。今日。父の天慶。亡む。一将門將軍。あり。と
たり。不笑侍り。ね。何と。かじ。む。と。ひ。れ。如月
尼。不。驚。た。色。な。く。せ。何。人。が。あ。る。ひ。り。ど。は。れ。と。か。う。い。は
せん。と。べ。あ。い。ま。実。と。か。り。せ。ん。亡。父。の。事。と。い。は。し。が
敵。と。あり。む。ひ。つ。ひ。不。誅。と。い。は。し。む。ね。其。時。は。胎。内。の。り。し。が
汝。と。産。一。妻。の。親。情。あ。く。斬。敵。の。子。あり。と。繼。祿。の。ら。り。我。方。へ
あ。う。り。わ。る。ゆ。き。と。い。は。し。ふ。ん。な。つ。ひ。て。育。つ。り。我。ハ。十六。才。の。年
父。の。後。世。の。悲。し。さ。ふ。か。る。姿。と。あり。ね。は。十五。才。さ。れ。ば。い。ふ。も

けさまへおぼへ。その候めてめしんめいつひおはさじとされて。刑戮の
辱めふりんと必定あり。只今中判整へて父上の亡跡と弔まか
らせ。その方の無事とも願へうと。さあぐと語りて。出家とそ
りけしむ。平を却つて。おのれも。これまで。たゞ。諫めゆひ。心お起
らぬ。青道心。いの用あり。とらふ。出家とそめめ。おのれ。まうひひ
あま。心あり。とりあふ。如月尼。真とて。おぼへ。只涙おど
かまされける。平を却つて。とらふ。袖のうらめて。印とむ。おの
うらふ。咒文とそめ。今日。うらむ。将門の鬮と得て。憤發し。其志
とつぎ。大儀と發起し。始終をわたり。おの鬮と出して。えせ。さ
又。さう。小咒文とそめ。けり。今。おの。愁ふ。おの。打伏し。如
月尼。忽起し。柳眉とそめ。な。星眼とつ。色とけ。ま。と。ひ

けり。あま。誤り。ね。我。今。まで。女。の。心。よ。と。して。仏。お。お。り。つ。り。あ。く。く
月。日。と。費。し。つ。つ。こ。後。悔。ま。ね。我。女。も。も。猛。將。の。胤。さ。つ。つ。と。つ
父。の。志。と。は。が。ご。ん。今。より。仏。戒。と。破。し。還。俗。し。て。汝。と。心。と。合。せ。四。海。と
私。し。天下。と。覆。し。て。万。衆。の。帝。祚。と。う。ら。ひ。父。の。孝。養。と。な。ま。べ。い。戒。行
と。破。る。と。ほ。し。これ。え。よ。こ。水晶。の。念。珠。と。あ。つ。と。引。き。う。て。投。捨。し。面
色。お。さ。し。く。も。え。え。う。ら。つ。つ。こ。その。おの。鬮。と。つ。き。て。涙。と。あ。ぐ。い。上
素。懐。と。と。げ。ふ。つ。ど。か。くの。さ。め。し。白。骨。と。あ。り。あ。入。法。運。の。つ。こ。な。さ
よ。我。く。兄弟。本。望。と。と。げ。ゆ。り。帝王。の。礼。と。以。て。祭。り。霊。魂。と。慰。し
し。と。べ。い。それ。ま。ま。い。汝。り。り。な。れ。と。平。を。却。つ。れ。と。涙。し。又。い。ひ
け。り。か。ら。大。儀。と。企。ん。と。ひ。も。い。も。善。提。の。乃。室。幢。天。蓋。と。と
ま。く。と。ん。と。深。く。ひ。め。お。ま。く。軍。旗。の。り。汝。お。あ。ま。べ。い。と。仏。壇。の。下

より取出して押しとるべ。金銀と以て日月の像と打つけし
 錦の旗あり。平を部とどりののりて。赤ひ。旗のうへに坊上カ
 とくへふ。本懐をどげんと疑ひは。くふいある吉日ぞそ兄弟
 共小いさくうり。ふ又善知安方の平を部かゆへとどつひ小
 此所ふり。先程より枝折戸の外ふらどと。始終の様子とせ
 戸と押ひくも内ふのれば。平を部又うけ。汝に奴あれば案内もを
 しくうち入るもことさむ。時小安方庭上小跪つき。恭礼と行きて云若君
 へは又知りのま。某へ沙家の子六郎公連が一子次郎安方とや
 老るる。亡君の御勤尚とさうりて。奥州外へ濱小住。本名と
 やして今善知と名告ゆ。しももくや小生立ふる。牙君も
 恙なくあり。赤ひ小堪侍とさうりて。如月尼つりく。るるべ。

んおがえわ。安方されば。さかりひがけざる。對面をとつて心中ふは
 折のれ時来まりとさひけり。さて安方あふさばちくくさひより。
 某先程より門外ふりて。沙兄弟の御お後とすつる。あまのさほや
 さるいまり。沙企をゆりひきて。これと諫の發語そく。武義五郎が
 遺言ふより大政官の印と携来り。朝廷ふさうけて。若君の助命と
 乞。剃髪とさうりんと。ゆへと尋て此小来り。この始終と語りければ。
 平を部その言の終とまも。何とつて。汝大政官の印と持来り。
 ちや。それこそか。我望さうりの物あり。無益の多言と吐きとくも。
 そくその印とせ。我小泣せしむ。安方いさく。官印ハ朝廷
 かさげ。君の助命と願ん為めを。持来り。いさく。さるゆ。ま
 沙企の用ふさく。や。いな。涙せ。いな。涙をまじく。忠義と非望小



如月 尼 妖術 悪意 謀叛 兄弟 うそ 安方 自殺

母よりて 小妻ト とうらん といさめて



善知 卷之

唯菩提の房と行ふと。詞と尽し理と結して諫をもいと苦しげめて。
や息もとんぐりあう。折しも後山の方小草刈童の吹とさむみや
笛の音風ふつれてかとうふきこえいと哀ととふけり。如月尼いうれる
面色ふて。かそれ安方よ。勘當の刃をも憚ど。人も伏さぬ理ととき。仇
ある源家と結養して。我輩と誹謗。鋭氣とくく。奈奇怪わま
まのり。平を却よ。どうや彼奴が頭とともて。軍神の血祭せよと下知
まふぞ。平を却とらえぬといひ。あも氷と刀とわげて。安方が
首ととつくと打おとすと。憐むべうめと義士南柯の夢と醒とね。
如月尼うぐり。開伽桶の水とくく。平を却郎が血刀ふそとぎ。縹
帽子ととりや。おぬぐい。油が平の裏天暗あり。かよと斧鉞ととら
まむふ不足とと結養とれば。平を却郎いと。某今より祖父良將

又將門の両字ととり。相馬を却良門と名告べ。とひ立ち吉日うら
片時も猶豫とんぐり。幸なる安方が旅装束。これと以て姿とと
これよりとぬ旅立べ。手とや。安方が衣服とと。我
かひべ。如月尼一袋の金と。我かる企の心なく。高野山へ詞堂
金おかさめんと。たくりへおま。は金子。ワグらなれども尚分の路用
かせよと。あふま。平を却押し。某諸國とわら。蝦蟇の術と
以て味方とるづけ。官印ととりて。軍勢と催促。義兵とわら。時
い。ゆむと。先とれ。は菴中かめ。お
せよ。心。人おさ。あ。おんい。と。立おん
し。所。忠義。小。疑。安方。首。軀。か。背。後。平。を。却
が。腰。お。死。つ。ひ。さ。平。を。却。願。て。執。念。汝。き。奴。う。ま。こ。足。と

めけて撲地と蹴倒し。又立ちあがりひらふの方ふ。心火をんと燃上り。安方が
姿まがろりのぞくくめつれて。まなぞかんと立ふとがる。死しても
た田まね金鉄の忠義の心を哀る。大膽強氣の平右衛門。刀を
抜て切らひ。のひらへ彼奴が屍にまきまき取らひ。と
ひまて。いづくともなく出たきけり

善知傳卷之一終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

